

合同部分群に関する length spectrum の重複度について On multiplicities of length spectra for congruence subgroups

橋本康史
Yasufumi Hashimoto

概要

Length spectrum は、リーマン面上の素な閉測地線の長さの集合として定義されるが、同時に、対応する基本群の素な双曲的共役類の跡 (トレース) の集合としても解釈できる。Length spectrum の重複度の和に関する漸近式は、素測地線定理から直ちに与えられるが、Bogomolny-Leyvraz-Schmit (1996) と Peter (2002) は、モジュラー群に関して重複度の 2 乗和に関する漸近公式を導いた。本稿では、その漸近公式を任意のべき乗和および任意の合同部分群に対して拡張できたので、その成果をまとめる。なお、本稿では証明を大幅に省略した。証明の詳細については [8] を参照していただきたい。

1 導入

$H := \{x + y\sqrt{-1}, y > 0\}$ を複素上半平面, Γ を $\text{vol}(\Gamma \backslash H)$ が有限になるような $\text{SL}_2(\mathbb{R})$ の離散部分群とする。 $\text{Prim}(\Gamma)$ を Γ の素な双曲的共役類の集合, $N(\gamma)$ を $\gamma \in \text{Prim}(\Gamma)$ の固有値の大きいほうの 2 乗とする。このとき、次の漸近式が成り立つ (素測地線定理, [20, 9]) .

$$\pi_\Gamma(x) := \#\{\gamma \in \text{Prim}(\Gamma) \mid N(\gamma) < x\} \sim \text{li}(x) \quad \text{as } x \rightarrow \infty. \tag{1}$$

ここで、 $\text{li}(x) := \int_2^x (\log t)^{-1} dt$ である。次に $\text{Tr}(\Gamma)$ を $\gamma \in \text{Prim}(\Gamma)$ の $\text{tr}\gamma$ の集合, $m_\Gamma(t)$ を $\text{tr}\gamma = t$ をみたす $\gamma \in \text{Prim}(\Gamma)$ の個数とする。 $\text{tr}\gamma$ と $N(\gamma)$ の間には

$$\text{tr}\gamma = N(\gamma)^{1/2} + N(\gamma)^{-1/2}, \quad N(\gamma)^{1/2} = \frac{1}{2} \left(\text{tr}\gamma + \sqrt{(\text{tr}\gamma)^2 - 4} \right),$$

という関係があるので、 $\{(t, m_\Gamma(t))\}_{t \in \text{Tr}(\Gamma)}$ を $\Gamma \backslash H$ 上の length spectrum とみなせる。また、素測地線定理 (1) は次のようにも記述できる。

$$\pi_\Gamma(x^2) = \sum_{\substack{t \in \text{Tr}(\Gamma) \\ t < x}} m_\Gamma(t) \sim \text{li}(x^2). \tag{2}$$

Length spectrum はリーマン面を特徴づけ、という観点から重要な研究対象である。というのも、2つのコンパクトリーマン面において、length spectrum が一致することとラプラシアンノス

MSC: primary: 11M36; secondary: 11F72

Keywords: length spectrum, congruence subgroups, prime geodesic theorem, class numbers

ベクトルが一致することは同値であることが知られている ([10]). 加えて, セルバーグ跡公式の幾何サイドが length spectrum で記述できることから, 跡公式は length spectrum とラプラシアンの特値の関係式を与えているといえる.

ラプラシアンの固有値と比べると, length spectrum は 2×2 行列の跡で与えられるので, 直感的にわかりやすそうな気がする. しかし実際には, わかっていることは必ずしも多くなく, モジュラー群と同じ 2 元生成のヘッケ三角形群に対してすら, length spectrum は初等的にあらわされていない. また, その漸近的な挙動については, 重複度 $m_\Gamma(t)$ が任意の Γ について非有界であること [15] や, 素測地線定理から重複度の和が (2) とあらわされるが, 一般的にこれ以上のことはわかっていない. 実はこれについては, 「length spectrum の漸近的な挙動には, 一般的に何か法則性があるはずだが, まだわかっていない」のではなく, 「 Γ によって, 挙動が違う」と指摘する研究者も少なくない. とくに, Γ が数論的 (arithmetic) の場合には重複度が大きく, そうでないときには重複度は小さい, と考えられており, この相違点は, ラプラシアンの固有値の分布にも影響を与えている, ともいわれている [2, 3, 12, 13] が, 厳密な証明はまだまだ先のようなのである ([22, 12, 18, 6]).

本稿では, Γ がモジュラー群およびその合同部分群であるとき $m_\Gamma(t)$ の増大度について調べる. モジュラー群の場合には明らかに $\text{Tr}(\text{SL}_2(\mathbb{Z})) = \mathbb{Z}_{\geq 3}$ であり, 合同部分群の場合にも $\text{Tr}(\Gamma)$ は有限密度の $\mathbb{Z}_{\geq 3}$ の部分集合であることはすぐわかる. なので, これらの群に関する素測地線定理 (2) は整数に関する和として, 次のように書ける.

$$\pi_\Gamma(x^2) = \sum_{\substack{t \in \mathbb{Z} \\ 3 \leq t < x}} m_\Gamma(t) \sim \text{li}(x^2). \quad (3)$$

一般に, $m_\Gamma(t)$ を初等的な関数を使って表すことは難しいが, 合同部分群のときは $m_\Gamma(t)$ を不定値 2 元 2 次形式の類数を用いて表せることが知られている ([17, 7], Proposition 2.1, 2.2). Bogomolny-Leyvraz-Schmit [3] や Peter [14] は, 古典的な解析数論における類数に関する研究成果やそこで用いられたアプローチを応用し, $\Gamma = \text{SL}_2(\mathbb{Z})$ と整数 $r \geq 0$ について次の漸近公式を得た.

$$\pi_{\text{SL}_2(\mathbb{Z})}^{(2)}(x^2; r) := \sum_{3 \leq t < x} m_{\text{SL}_2(\mathbb{Z})}(t) m_{\text{SL}_2(\mathbb{Z})}(t+r) \sim c_{\text{SL}_2(\mathbb{Z})}^{(2)}(r) \text{li}_2(x^3). \quad (4)$$

ここで, $\text{li}_2(x) := \int_2^x (\log t)^{-2} dt$ で, $c_{\text{SL}_2(\mathbb{Z})}^{(2)}(r)$ は素数に関する積であらわされる定数である ([3, 14]). さらに, Lukianov [11] は合同部分群 $\Gamma_0(n)$ と不定値四元数環の単数群から得られる余コンパクトな Γ に対して, 同様の漸近公式を得た. この漸近公式にあらわれる定数 $c_\Gamma^{(2)}(0)$ は, ラプラシアンの固有値のばらつきを表す number variance に関する漸近式にあらわれる ([16, 11]) ことが知られている.

本稿の主結果は以下のとおりである.

Theorem 1.1. $k \geq 2$ を整数, $\mathbf{r} := (r_1, \dots, r_k) \in \mathbb{Z}^k$ とし, Γ を $\text{SL}_2(\mathbb{Z})$ の合同部分群とする. このとき, 次が成り立つ.

$$\pi_\Gamma^{(k)}(x^2; \mathbf{r}) := \sum_{3 \leq t < x} m_\Gamma(t+r_1) \cdots m_\Gamma(t+r_k) \sim c_\Gamma^{(k)}(\mathbf{r}) \text{li}_k(x^{k+1}),$$

ここで, $\text{li}_k(x) := \int_2^x (\log t)^{-k} dt$ で, $c_\Gamma^{(k)}(\mathbf{r})$ は定数である ($c_\Gamma^{(k)}(\mathbf{r})$ の具体的な記述は Theorem 3.1 で述べる).

2 合同部分群に関する length spectrum

自然数 $n \geq 1$ に対して, $\mathbb{Z}_n := \mathbb{Z}/n\mathbb{Z}$,

$$\Gamma(n) := \text{Ker}(\text{SL}_2(\mathbb{Z}) \xrightarrow{\text{proj}} \text{SL}_2(\mathbb{Z}_n)) = \{\gamma \in \text{SL}_2(\mathbb{Z}) \mid \gamma \equiv I \pmod{n}\},$$

$$\hat{\Gamma}(n) := \text{Ker}(\text{SL}_2(\mathbb{Z}) \xrightarrow{\text{proj}} \text{PSL}_2(\mathbb{Z}_n)) = \{\gamma \in \text{SL}_2(\mathbb{Z}) \mid \gamma \equiv \alpha I \pmod{n}, \alpha^2 \equiv 1 \pmod{n}\}$$

とおく. 本稿では, Γ が $\hat{\Gamma}(n) \subset \Gamma \subset \text{SL}_2(\mathbb{Z})$ で, すべての $m < n$ に対して, $\Gamma \not\subset \hat{\Gamma}(m)$ であるとき, Γ を階数 n の合同部分群とよぶことにする.

この節では, 合同部分群に関する length spectrum を不定値 2 元 2 次形式を用いてあらわす.

2.1 2 次形式とモジュラー群

まず,

$$Q(x, y) = [a, b, c] := ax^2 + bxy + cy^2$$

を係数 $a, b, c \in \mathbb{Z}$ ($\text{gcd}(a, b, c) = 1$) をもつ 2 元 2 次形式とし, $D = D(Q) := b^2 - 4ac$ を $[a, b, c]$ の判別式とする. $Q(x, y) = Q'((x, y).g)$ をみたす $g \in \text{SL}_2(\mathbb{Z})$ が存在するとき, 2 つの 2 次形式 Q と Q' が同値である ($Q \sim Q'$) という. $h(D)$ を判別式 D をもつ 2 次形式の同値類の個数 (つまり狭義の類数) とする. 判別式 D が正であるとき, ペル方程式 $t^2 - Du^2 = 4$ の解 (t, u) が無限に存在することが知られている. $t^2 - Du^2 = 4$ の小さい順に j 番目の正の解を $(t_j, u_j) = (t_j(D), u_j(D))$ と書き, $\epsilon_j(D) := (t_j(D) + u_j(D)\sqrt{D})/2$ とおく. $\epsilon(D) = \epsilon_1(D)$ は D の狭義の基本単数であり, $\epsilon_j(D) = \epsilon(D)^j$ である.

2 次形式 $Q = [a, b, c]$ とペル方程式の正の解 (t, u) に対して, $\text{SL}_2(\mathbb{Z})$ の元

$$\gamma(Q, (t, u)) := \begin{pmatrix} \frac{t+bu}{2} & -cu \\ au & \frac{t-bu}{2} \end{pmatrix} \in \text{SL}_2(\mathbb{Z}). \quad (5)$$

を定義する. 逆に, $\gamma = (\gamma_{ij})_{1 \leq i, j \leq 2} \in \text{SL}_2(\mathbb{Z})$ に対して,

$$\begin{aligned} t_\gamma &:= \gamma_{11} + \gamma_{22}, & u_\gamma &:= \text{gcd}(\gamma_{21}, \gamma_{11} - \gamma_{22}, -\gamma_{12}), \\ a_\gamma &:= \gamma_{21}/u_\gamma, & b_\gamma &:= (\gamma_{11} - \gamma_{22})/u_\gamma, & c_\gamma &:= -\gamma_{12}/u_\gamma, \\ Q_\gamma &:= [a_\gamma, b_\gamma, c_\gamma], & D_\gamma &:= \frac{t_\gamma^2 - 4}{u_\gamma^2} = b_\gamma^2 - 4a_\gamma c_\gamma \end{aligned} \quad (6)$$

とおく. (5) と (6) は, $\text{SL}_2(\mathbb{Z})$ の素な双曲類と原始的不定値 2 元 2 次形式の同値類の間の 1 対 1 の対応を与えている ([17] と [5] の第 5 章を参照). なので, $\Gamma = \text{SL}_2(\mathbb{Z})$ の場合の重複度 $m_\Gamma(t)$ は次のようにあらわされる.

Proposition 2.1. $t \geq 3$ を整数とすると, 次が成り立つ.

$$m_{\text{SL}_2(\mathbb{Z})}(t) = \sum_{u \in U(t), j_{t,u}=1} h(D_{t,u}),$$

ここで, $D_{t,u} := (t^2 - 4)/u^2$, $U(t) := \{u \geq 1 \mid u^2 \mid t^2 - 4, D_{t,u} \equiv 0, 1 \pmod{4}\}$ で, $j_{t,u} \geq 1$ は $\epsilon_j(D_{t,u}) = \frac{1}{2}(t + \sqrt{t^2 - 4})$ をみたす整数である.

2.2 合同部分群の場合

Venkov-Zograf の公式 [23] を使うと、次が成り立つことが分かる。

$$\hat{m}_\Gamma(t) := \sum_{\substack{\gamma \in \text{Prim}(\Gamma), j \geq 1 \\ t_\gamma = t}} \frac{1}{j} = \sum_{\substack{\gamma \in \text{Prim}(\text{SL}_2(\mathbb{Z})), j \geq 1 \\ t_\gamma = t}} \frac{1}{j} \text{tr} \chi_\Gamma(\gamma^j). \quad (7)$$

ここで、 $\chi_\Gamma := \text{Ind}_\Gamma^{\text{SL}_2(\mathbb{Z})} 1$ である。 Γ が合同部分群であるとき、 $\text{tr} \chi_\Gamma(\gamma)$ は (t_γ, u_γ) にのみ依存するので、次が得られる。

Proposition 2.2. $n \geq 1$ と $t \geq 3$ を整数とし、 Γ を階数 n の合同部分群とする。すると、次が成り立つ。

$$\hat{m}_\Gamma(t) = \sum_{u \in U(t)} \frac{1}{j_{t,u}} \omega_\Gamma(t, u) h(D_{t,u}). \quad (8)$$

ここで、 $\omega_\Gamma(t, u)$ は $\text{tr} \chi_\Gamma(\gamma)$ から得られた値で、 $0 \leq \omega_\Gamma(t, u) \leq [\text{SL}_2(\mathbb{Z}) : \Gamma]$ をみたしている。□

3 Theorem 1.1 の証明

3.1 係数 $c_\Gamma^{(k)}(\mathbf{r})$ の表示

証明の前に、Theorem 1.1 を、係数 $c_\Gamma^{(k)}(\mathbf{r})$ の具体的な表示を含めて、次のように書き換える。

Theorem 3.1. $t \geq 3$ を整数、 Γ を $\text{SL}_2(\mathbb{Z})$ の合同部分群、

$$I_\Gamma(t) := \frac{\log\left(\frac{1}{2}(t + \sqrt{t^2 - 4})\right)}{\sqrt{t^2 - 4}} \hat{m}_\Gamma(t)$$

とする。このとき、任意の $k \geq 1$ 、 $\mathbf{r} := (r_1, \dots, r_k) \in \mathbb{Z}^{k-1}$ に対して、極限

$$c_\Gamma^{(k)}(\mathbf{r}) := \lim_{x \rightarrow \infty} \frac{1}{x} \sum_{3 \leq t \leq x} I_\Gamma(t + r_1) \cdots I_\Gamma(t + r_k)$$

が存在し、

$$c_\Gamma^{(k)}(\mathbf{r}) = \prod_p \left(\lim_{l \rightarrow \infty} p^{l(k-1)} \sum_{m \in \mathbb{Z}_p^l} F_\Gamma(m + r_1; p^l) \cdots F_\Gamma(m + r_k; p^l) \right)$$

が成り立つ。ただし、

$$F_\Gamma(m; n) := \frac{\#\{\gamma \in \Gamma(n) \setminus \Gamma(n)\Gamma \mid \text{tr} \gamma \equiv m \pmod{n}\}}{\#\Gamma(n) \setminus \Gamma(n)\Gamma}$$

である。

“Theorem 3.1 \Rightarrow Theorem 1.1” であることは容易にわかるので、以下、Theorem 1.1 の代わりに Theorem 3.1 を証明する。

3.2 $I_\Gamma(t)$ を周期関数で近似すること

Peter[14] はモジュラー群の場合に, $I_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{Z})}(t)$ を周期関数で近似し, その性質を使って $m_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{Z})}(t)$ の 2 乗和に関する結果を得た. 本稿では, その手法を踏襲する. なお, 本節の算術関数に関する議論については [19] を参照していただきたい.

整数 $q \geq 1$ と算術関数 $f: \mathbb{N} \rightarrow \mathbb{C}$ に対して, セミノルム

$$\|f\|_q := \left(\limsup_{x \rightarrow \infty} \frac{1}{x} \sum_{1 \leq n \leq x} |f(n)|^q \right)^{1/q}$$

を定義する. 任意の $\epsilon > 0$ に対して, $\|f - h\|_q < \epsilon$ をみたす周期関数 h が存在するとき, 関数 f を q -limit periodic function とよぶ. \mathcal{D}^q を q -limit periodic function の集合とすると, $\|f_1 - f_2\|_q = 0$ なる関数 f_1, f_2 を同一視することで, \mathcal{D}^q はノルム $\|\cdot\|_q$ をもつバナッハ空間になる.

周期関数の性質から, 次の命題が成り立つことがわかる.

Proposition 3.2. $q \geq 1$ を整数, $f_1, \dots, f_q \in \mathcal{D}^q$ で, f_i は周期関数の列 $\{f_{ij}\}_{j \geq 1}$ によって近似される, つまり, $\|f_{ij} - f_i\|_q \rightarrow 0$ ($j \rightarrow \infty$) をみたすとす. このとき, f_{1j}, \dots, f_{qj} は同じ周期 N_j ($\lim_{j \rightarrow \infty} N_j = \infty$) をもつと考えるとよい. すると, 次が成り立つ.

$$\lim_{x \rightarrow \infty} \frac{1}{x} \sum_{1 \leq t \leq x} f_1(t) \cdots f_q(t) = \lim_{j \rightarrow \infty} N_j^{q-1} \sum_{m \in \mathbb{Z}_{N_j}} F_{1j}(m; N_j) \cdots F_{qj}(m; N_j).$$

ここで,

$$F_{ij}(m; N_j) := \lim_{x \rightarrow \infty} \frac{1}{x} \sum_{\substack{1 \leq t \leq x \\ t \equiv m \pmod{N_j}}} f_{ij}(t) = \frac{1}{N_j} f_{ij}(m)$$

である. □

Γ が合同部分群であるときに, I_Γ が q -limit periodic であることを示す. I_Γ の定義と Proposition 2.2, および類数公式 $h(D) \log \epsilon(D) = D^{1/2} L(1, D)$ から,

$$I_\Gamma(t) = \sum_{u \in U(t)} \omega_\Gamma(t, u) u^{-1} L(1, D_{t,u})$$

とあらわせることがわかる. ここで, $L(1, D_{t,u}) := \prod_p (1 - (D_{t,u}/p)p^{-1})^{-1}$ である. 整数 $P \geq 2, M \geq 1$ に対して,

$$\beta_{\Gamma, P, M}(t) := \sum_{\substack{u \in U(t) \\ p|u \Rightarrow p \leq P \\ \mathrm{ord}_p u \leq M}} \omega_\Gamma(t, u) u^{-1} \prod_{p \leq P} (1 - (D_{t,u}/p)p^{-1})^{-1}$$

とおく. $\omega_\Gamma(t, u)$ は有限群 $\mathrm{PSL}_2(\mathbb{Z}_n)$ の指標から得られているので, この $\beta_{\Gamma, P, M}(t)$ が周期的であることはすぐにわかる.

周期関数 $\beta_{\Gamma, P, M}(t)$ は, $P, M \rightarrow \infty$ によって形式的に $I_\Gamma(t)$ に収束するように定義されているが, 実際に Peter [14] によって, すべての $q \geq 1$ に対して, I_Γ が $\beta_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{Z}), P, M}$ で近似できる q -limit periodic な関数であることが示された. 合同部分群であるときも, モジュラー群に関する Peter [14] の結果を使うと, 次の Lemma が成り立つことがわかる.

Lemma 3.3. 任意の $q \geq 1$ に対して,

$$\|I_\Gamma - \beta_{\Gamma, P, M}\|_q \ll P^{-\epsilon} + 2^{-M} (\log P)^2 \quad \text{as } P, M \rightarrow \infty$$

をみたす定数 $\epsilon > 0$ が存在する.

このことから, 任意の q に対して, $I_\Gamma \in \mathcal{D}^q$ であることがわかる.

3.3 $I_\Gamma(t)$ の部分和

ここでは, Theorem 3.1 にある $c_\Gamma^{(k)}(\mathbf{r})$ の表示を得るために, $I_\Gamma(t)$ の部分和に関する漸近式を求める. チェボタレフ型素測地線定理 [17, 21] を使うと次が得られる.

Lemma 3.4. $N \geq 1$ を整数とし, $m \in \mathbb{Z}_N$, Γ を $\mathrm{SL}_2(\mathbb{Z})$ の合同部分群とする. このとき, 次が成り立つ.

$$\lim_{x \rightarrow \infty} \frac{1}{x} \sum_{\substack{3 \leq t \leq x \\ t \equiv m \pmod{N}}} I_\Gamma(t) = \frac{\#\{\gamma \in \Gamma(N) \setminus \Gamma\Gamma(N) \mid \mathrm{tr} \gamma \equiv m \pmod{N}\}}{\#\Gamma(N) \setminus \Gamma\Gamma(N)}.$$

□

$N = p^r$, $\Gamma\Gamma(p^r) = \mathrm{SL}_2(\mathbb{Z})$ のとき, Lemma 3.4 の右辺は次のような値をとる.

Lemma 3.5. $p = 2, r \geq 6$ のとき, 次が成り立つ.

$$\begin{aligned} & \#\{\gamma \in \mathrm{SL}_2(\mathbb{Z}_{2^r}) \mid \mathrm{tr} \gamma \equiv t \pmod{2^r}\} \\ &= \begin{cases} 2^{2r-1}, & (2 \nmid t), \\ 3 \cdot 2^{2r-2}, & (4 \mid t), \\ 3 \cdot 2^{2r-1}, & (t \equiv 16t_1 \pm 2 \pmod{2^r}, t_1 \equiv 5 \pmod{8}, \\ & \text{or } t \equiv 2^l t_1 \pm 2 \pmod{2^r}, t_1 \equiv 1 \pmod{8}, l \geq 6: \text{ even}), \\ 5 \cdot 2^{2r-2}, & (t \equiv 16t_1 \pm 2 \pmod{2^r}, t_1 \not\equiv 5 \pmod{8}), \\ 3 \cdot 2^{2r-1} - 2^{2r-l/2}, & (t \equiv 2^l t_1 \pm 2 \pmod{2^r}, t_1 \not\equiv 1 \pmod{8}, l \geq 6: \text{ even}), \\ 3 \cdot (2^{2r-1} - 2^{2r-(l+3)/2}), & (t \equiv 2^l t_1 \pm 2 \pmod{2^r}, 2 \nmid t_1, l \geq 3: \text{ odd}), \\ 3 \cdot 2^{2r-1} - 2^{\lfloor (3r-1)/2 \rfloor}, & (t \equiv \pm 2 \pmod{2^r}). \end{cases} \end{aligned}$$

$p \geq 3, r \geq 1$ のとき, 次が成り立つ.

$$\begin{aligned} & \#\{\gamma \in \mathrm{SL}_2(\mathbb{Z}_{p^r}) \mid \mathrm{tr} \gamma \equiv t \pmod{p^r}\} \\ &= \begin{cases} p^{2r-1}(p-1), & ((T/p) = -1), \\ p^{2r-1}(p+1), & ((T/p) = 1 \text{ or } p^l \parallel T, 2 \mid l, (\frac{T}{p^l}/p) = 1), \\ p^{2r} + p^{2r-1} - 2p^{2r-l/2-1}, & (p^l \parallel T, 2 \mid l, (\frac{T}{p^l}/p) = -1), \\ p^{2r} + p^{2r-1} - p^{2r-(l+1)/2} - p^{2r-(l+3)/2}, & (p^l \parallel T, 2 \nmid l), \\ p^{2r} + p^{2r-1} - p^{\lfloor (3r-1)/2 \rfloor}, & (T \equiv 0 \pmod{p^r}), \end{cases} \end{aligned}$$

ここで, $T := t^2 - 4$ である.

□

3.4 Theorem 3.1 の証明

Lemma 3.3 から, 任意の $q \geq 1$ に対して, $I_\Gamma \in \mathcal{D}^q$ であり, I_Γ が $\beta_{\Gamma, P, M}$ で近似できることが分かる. なので, Proposition 3.2 を $f_i(t) = I_\Gamma(t + r_i)$ に適用でき, $\{f_{ij}(t)\}_j = \{\beta_{\Gamma, P, M}(t + r_i)\}_{P, M}$ とすることができる. このことから, 次の成り立つ.

$$c_\Gamma^{(k)}(\mathbf{r}, j) := N_j^{k-1} \sum_{m \in \mathbb{Z}_{N_j}} F_{1j}(m; N_j) \cdots F_{kj}(m; N_j) \rightarrow c_\Gamma^{(k)}(\mathbf{r}) \quad \text{as } j \rightarrow \infty. \quad (9)$$

次に $c_\Gamma^{(k)}(\mathbf{r}, j)$ と

$$\tilde{c}_\Gamma^{(k)}(\mathbf{r}, j) := N_j^{k-1} \sum_{m \in \mathbb{Z}_{N_j}} F_1(m; N_j) \cdots F_k(m; N_j)$$

を比較する. ここで, $F_i(m; N_j) := F_\Gamma(m + r_i; N_j)$ である. これらの差は

$$\begin{aligned} \left| c_\Gamma^{(k)}(\mathbf{r}, j) - \tilde{c}_\Gamma^{(k)}(\mathbf{r}, j) \right| &\leq N_j^{k-1} \sum_{m \in \mathbb{Z}_{N_j}} \sum_{1 \leq l \leq k} F_{1j}(m; N_j) \cdots F_{l-1, j}(m; N_j) \\ &\quad \times |F_{lj}(m; N_j) - F_l(m; N_j)| F_{l+1}(m; N_j) \cdots F_k(m; N_j). \end{aligned} \quad (10)$$

と評価できる. F_{ij} と $\beta_{\Gamma, P, M}$ の定義から,

$$N_j F_{ij}(m; N_j) \leq [\mathrm{SL}_2(\mathbb{Z}) : \Gamma] \left(\prod_{p_1 \leq P} \sum_{0 \leq l \leq M} p_1^{-l} \right) \sum_{p_2 \leq P} (1 - p_2^{-1})^{-1} \ll (\log P)^2 \quad (11)$$

である. 互いに素な n_1, n_2 に対して, $F_i(m; n_1 n_2) = F_i(m; n_1) F_i(m; n_2)$ であり, 有限個の N を除いて $\Gamma \hat{\Gamma}(N) = \mathrm{SL}_2(\mathbb{Z})$ であることから,

$$N_j F_i(m; N_j) \ll \prod_{p \leq P} \frac{p^{2M+1} \#\{\gamma \in \mathrm{SL}_2(\mathbb{Z}_{p^{2M+1}}) \mid \mathrm{tr} \equiv m + r_i \pmod{p^{2M+1}}\}}{\#\mathrm{SL}_2(\mathbb{Z}_{p^{2M+1}})}$$

が成り立つ. Lemma 3.5 と $\#\mathrm{SL}_2(\mathbb{Z}_{p^r}) = p^{3r-2}(p^2 - 1)$ から,

$$N_j F_i(m; N_j) \ll \prod_{p \leq P} \frac{p^{2M+1} p^{4M+1} (p+1)}{p^{6M+1} (p^2 - 1)} = \prod_{p \leq P} (1 - p^{-1})^{-1} \ll \log P \quad (12)$$

である. 方程式 (10) に (11), (12) と Lemma 3.3 を適用すると, 次のを得る.

$$\begin{aligned} \left| c_\Gamma^{(k)}(\mathbf{r}, j) - \tilde{c}_\Gamma^{(k)}(\mathbf{r}, j) \right| &\ll (\log P)^{2k-2} \sum_{1 \leq l \leq k} \sum_{m \in \mathbb{Z}_{N_j}} |F_{lj}(m; N_j) - F_l(m; N_j)| \\ &\leq (\log P)^{2k-2} \sum_{1 \leq l \leq k} \|f_{lj} - f_l\|_1 \\ &\ll (\log P)^{2k-2} (P^{-\epsilon} + 2^{-M} (\log P)^2) \rightarrow 0 \quad \text{as } P, M \rightarrow \infty \quad (M \gg \log P). \end{aligned} \quad (13)$$

なので, $c_\Gamma^{(k)}(\mathbf{r}) = \lim_{j \rightarrow \infty} \tilde{c}_\Gamma^{(k)}(\mathbf{r}, j)$ であることが分かる. あとは F_i の乗法性を使うと, Theorem 3.1 で与えられている $c_\Gamma^{(k)}(\mathbf{r})$ の素数に関する積としての表示式を得る. \square

4 例

例として、 $\Gamma = \mathrm{SL}_2(\mathbb{Z})$ の場合の $c_{\Gamma}^{(k)}(0)$ を計算する.

$\Gamma = \mathrm{SL}_2(\mathbb{Z})$ のとき、明らかに任意の素べき p^l に対して $\Gamma\Gamma(p^l) = \mathrm{SL}_2(\mathbb{Z})$ であり、 $\#\mathrm{SL}_2(\mathbb{Z}_{p^r}) = p^{3r-2}(p^2-1)$ である. また、 $1 \leq l \leq r-1$ に対して、

$$\begin{aligned} \#\{t \in \mathbb{Z}_{p^r} \mid (T/p) = 1\} &= p^{r-1}(p-3)/2, \\ \#\{t \in \mathbb{Z}_{p^r} \mid (T/p) = -1\} &= p^{r-1}(p-1)/2, \\ \#\{t \in \mathbb{Z}_{p^r} \mid p^l \parallel T, (Tp^{-l}/p) = 1\} &= p^{r-1}(p-1), \\ \#\{t \in \mathbb{Z}_{p^r} \mid p^l \parallel T, (Tp^{-l}/p) = -1\} &= p^{r-1}(p-1), \\ \#\{t \in \mathbb{Z}_{p^r} \mid T \equiv 0 \pmod{p^r}\} &= 2. \end{aligned}$$

なので、これと Lemma 3.5 を組み合わせて計算すると、Theorem 3.1 で与えられる $c_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{Z})}^{(k)}(0)$ の各 p に対する因子は

$$\left\{ \begin{aligned} &\frac{1}{2} \left(\frac{2}{3}\right)^k + \frac{1}{4} + 2^{k-6} + \frac{3}{64} \left(\frac{5}{3}\right)^k + \sum_{\substack{3 \leq l \leq r-1 \\ \text{odd}}} 2^{k-l}(1-2^{-(l+1)/2})^k \\ &+ \sum_{\substack{6 \leq l \leq r-1 \\ \text{even}}} 2^{k-l-2}(1-3(1-3^{-1} \cdot 2^{-l/2+1})^k), & (p=2), \\ &\frac{1}{2}(1-3p^{-1})(1+p^{-1})^{-k} + \frac{1}{2}(1-p^{-1})^{-k+1} + p^{-2}(1+p^{-1})(1-p^{-1})^{-k} \\ &+ \sum_{l \geq 1} 2p^{-2l+1}(1-p^{-1})^{-k+1}(1-p^{-l})^k \\ &+ \sum_{l \geq 1} p^{-2l}(1-p^{-1})(1-p^{-2})^{-k}(1+p^{-1}-2p^{-l-1})^k. & (p \geq 3), \end{aligned} \right. \quad (14)$$

であることがわかる. とくに $k=2,3$ の場合、

$$\begin{aligned} c_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{Z})}^{(2)}(0) &= \frac{1015}{864} \prod_{p \geq 3} \frac{p^2(p^3+p^2-p-3)}{(p-1)^2(p+1)^3}, \\ c_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{Z})}^{(3)}(0) &= \frac{682495}{428544} \prod_{p \geq 3} \frac{p^8+p^7+p^6-5p^5-5p^3-5p^2-p-1}{(p-1)^2(p+1)^2(p^4+p^3+p^2+p+1)} \end{aligned}$$

である. なお、 $c_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{Z})}^{(2)}(0)$ は [3, 14] で得られたものと同一のものである. Γ が合同部分群である場合、有限個の p を除いて $\Gamma\Gamma(p^l) = \mathrm{SL}_2(\mathbb{Z})$ なので、明らかに

$$c_{\Gamma}^{(k)}(\mathbf{r}) \in c_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{Z})}^{(k)}(\mathbf{r}) \cdot \mathbb{Q}$$

である. $\Gamma = \Gamma_0(n), \hat{\Gamma}(n)$, $k=2,3$ の場合の $c_{\Gamma}^{(k)}(0)$ の値については、[8] を参照していただきたい.

講演中および講演後に数名の方から、 $c_{\Gamma}^{(k)}(0)$ を使って $m_{\Gamma}(t)$ の分布について知ることができる、とのご指摘をいただいた. 講演後に調べてみたところ、(証明は省くが) (14) を使うと、

$$C_1^k \ll c_{\Gamma}^{(k)}(0) \ll (C_2 \log k)^k \quad \text{as } k \rightarrow \infty$$

をみたす定数 $C_1, C_2 > 0$ が存在し、 $c_{\Gamma}^{(k)}(0)$ を k 次モーメントとする積率母関数が存在することが

わかった。なので、確かにご指摘のとおり、特性関数の反転公式を使えば、 $m_{\Gamma}(t)$ (または $I_{\Gamma}(t)$) の具体的な分布がわかりそうである。ただ、 $c_{\Gamma}^{(k)}(0)$ が素数に関する無限積であらわされているせいか、著者の力不足のせいか、具体的な分布をわかりやすい形で記述するという試みははまだ成功していない。何かわかった方は、ご一報いただけると幸いである。

謝辞: 本研究集会の代表者であり講演を勧めてくださった群馬大学の名越弘文氏、研究集会参加のための旅費を補助してくださった京都大学数理解析研究所、そして、4節末尾の件について貴重なご意見をくださった皆さまに、謹んで感謝の意を表します。また、本研究はJSPS科研費若手研究B課題番号26800020の助成を受けたものです。

参考文献

- [1] R. Aurich and J. Marklof, ‘Trace formulae for three-dimensional hyperbolic lattices and application to a strongly chaotic tetrahedral billiard’, *Phys. D* 92 (1996), 101–129.
- [2] E. Bogomolny, B. Georgeot, M.J. Giannoni and C. Schmit, ‘Arithmetical chaos’, *Physics Reports* 291 (1997), 219–324.
- [3] E. Bogomolny, F. Leyvraz and C. Schmit, ‘Distribution of eigenvalues for the modular group’, *Commun. Math. Phys.* 176 (1996), 575–617.
- [4] E. Bogomolny and C. Schmit, ‘Multiplicities of periodic orbit lengths for non-arithmetic models’, *J. Phys. A* 37 (2004), 4501–4526.
- [5] C. F. Gauss, ‘Disquisitiones arithmeticae’, Fleischer, Leipzig, (1801).
- [6] S. Geninska and E. Leuzinger, ‘A geometric characterization of arithmetic Fuchsian groups’, *Duke Math. J.* 142 (2008), 111–125.
- [7] Y. Hashimoto, ‘Arithmetic expressions of Selberg’s zeta functions for congruence subgroups’, *J. Number Theory* 122 (2007), 324–335.
- [8] Y. Hashimoto, ‘Correlations of multiplicities in length spectra for congruence subgroups’, *Bull. London Math. Soc.* 45 (2013), 175–190.
- [9] D. Hejhal, ‘The Selberg trace formula of $\mathrm{PSL}(2, \mathbb{R})$ I, II’, Springer Lec. Notes in Math. **548**, 1001 Springer-Verlag (1976, 1983).
- [10] H. Huber, ‘Zur analytischen Theorie hyperbolischer Raumformen und Bewegungsgruppen I, II’, *Math. Ann.* 138 (1959), 1–26, 142 (1961), 385–398 and 143 (1961), 463–464.
- [11] V. Lukianov, ‘A mean value theorem for closed geodesics on congruence surfaces’, *Forum Math.* 19 (2007), pp.851–903, <http://www.math.tau.ac.il/~rudnick/students/lukianovthesis.pdf> (Ph. D thesis version, Tel-Aviv University, 2005).
- [12] W. Luo and P. Sarnak, ‘Number variance for arithmetic hyperbolic surfaces’, *Commun. Math. Phys.* 161 (1994), 419–432.
- [13] J. Marklof, ‘On multiplicities in length spectra of arithmetic hyperbolic three-orbifolds’, *Nonlinearity* 9 (1996), 517–536.
- [14] M. Peter, ‘The correlation between multiplicities of closed geodesics on the modular surface’, *Commun. Math. Phys.* 225 (2002), 171–189.

- [15] B. Randol, 'The length spectrum of a Riemann surface is always of unbounded multiplicity', *Proc. Amer. Math. Soc.* 78 (1980), 455–456.
- [16] Z. Rudnick, 'A central limit theorem for the spectrum of the modular group', *Ann. Henri Poincaré* 6 (2005), 863–883.
- [17] P. Sarnak, 'Class numbers of indefinite binary quadratic forms', *J. Number Theory* 15 (1982), 229–247.
- [18] P. Schmutz, 'Arithmetic groups and the length spectrum of Riemann surfaces', *Duke Math. J.* 84 (1996), 199–215.
- [19] W. Schwarz and J. Spilker, 'Arithmetical functions', *London Mathematical Society LNS* 184, Cambridge University Press, 1994.
- [20] A. Selberg, 'Collected Papers I', Springer-Verlag (1989).
- [21] T. Sunada, ' L -functions in geometry and some applications', Curvature and topology of Riemannian manifolds (Katata, 1985), 266–284, *Lecture Notes in Math.* 1201, Springer, Berlin, 1986.
- [22] K. Takeuchi, 'A characterization of arithmetic Fuchsian groups', *J. Math. Soc. Japan* 27 (1975), 600–612.
- [23] A. B. Venkov and P. G. Zograf, 'Analogues of Artin's factorization formulas in the spectral theory of automorphic functions associated with induced representations of Fuchsian groups', *Math. USSR Izvestiya* 21(1983), 435–443.

〒 913-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原 1 番地

琉球大学理学部数理科学科

e-mail: hashimoto@math.u-ryukyu.ac.jp